

EMT981 再生系の再構成(2)

1. はじめに

前報(1)で、EMT981 の設置と再生経路の整備が終わりましたが、さらに手を加えていきます。

2. EMT981 の設置と試聴方法

前報(1)以降、EMT981 と CRV-555 に CCD-6 経由で平行にクロック入力するとわずかなタイミングのずれによると思われるブツブツノイズがまれに入ること気が付きましたので、プロ用の機器で行われる EMT981 のクロックアウトから CRV-555 にクロック入力するクロックのチェイン同期を行いました。

EMT981(*)→CRV-555(**)→DAC-1→TruPhase

* : GPS-777 より CCD-6 経由でクロック入力

** : EMT981 のクロックアウトよりクロック入力

さらに CRV-555 のデジタルアウトは BNC から XLR に変更して DAC-1 に接続し、トランスポート→リクロッカー→DAC のデジタル経路のオールバランス化を行いました。

また、EMT981 の電源ケーブルの差し込み口がガタがあるので USB ダンパーを二つ折りにして挟み込み、CRV-555 の電源ケーブルの差し込み口にも USB ダンパーを挟み込みました。

さらに CRV-555 にもマグナライザーを加え、EMT981 のアースは iPurifier AC のアースラインに接続するなどの調整も行いました。

3. EMT981 の試聴結果

試聴は前報(1)の藤田恵美に加えて下記を使用しました。これらは、直近に TruPhase の位相反転機能を利用して位相を確認したもので、再生経路は次のとおりでした。

CD ドライブ→fidata→Brooklyn DAC+→TruPhase

今回、EMT981 により、上記 2 項の再生経路でどのように聴こえるかを調べます。なお、ミサ曲口短調と Sonatas & Partitas は逆相であることが分っていますが、上記の再生経路では位相反転ができませんので、すべて正相のまま聴いていきます。

ARCHIV POCA-2009/10

J.S.Bach ミサ曲口短調

カール・リヒター指揮ミュンヘンバツハ管弦楽団

Deutsche Grammophon UCCG-9719/20

J.S.Bach Sonatas & Partitas

ヘンリク・シェリング

S&R AVCL-25005

J.S.Bach あなたがそばにいたら他

森麻季 (ソプラノ) 山岸茂人 (ピアノ)

GENUIN GEN 110209

J.S.Bach オーボエ協奏曲

ラモン・オルテガ・クエロ(オーボエ)

ペーター・ライナー指揮ポツダム室内アカデミー

藤田恵美は、前報(1)より、さらにボーカルのニュアンスや楽器の質感が向上し、ライブ録音らしい実在感が出てきています。

ミサ曲口短調は、ソプラノやテノールの声はよく通り、ヴァイオリンやフルートトラヴェルソは柔らかくに心地よく響き、合唱は分離しています。但し、位相があっていないので、定位が甘く、もう少し焦点があってほしいところが残ります。

Sonatas & Partitas は、いかにもシェリングらしい落ち着いた音色で、ヴァイオリンの胴鳴りも豊かです。但し、位相があっていないので、過度な広がり感があり、もう少し焦点があってほしいところが残ります。

森麻季は、ソプラノは張りがあり、伴奏のピアノも響きがゆたかです。

オーボエ協奏曲は、クエロのオーボエが柔らかく響き、バックのアンサンブルも豊かなハーモニーを奏で、通奏低音が明瞭になっています。

以上のすべてについて言えることは、デジタル臭さが感じられず、あたかもアナログを聴いているかのようです。なお、位相反転が可能な接続方法は別途検討いたします。

4. まとめ

前報(1)の再生経路に加えて、上記のような対策を採ったことにより EMT981 のポテンシャルを一層強く引き出すことができました。

以上